

〔原著〕 松本歯学 11 : 301~314, 1985

key words : 囊胞 — 鼻齒槽囊胞 — 統計 — 診断

## 鼻齒槽囊胞の1例とその文献的考察

河田直彦, 松井昭樹, 市野澤宏志, 高木正男, 渋井公滋

伊藤良彦, 賀数 恵, 藤田 研, 徳植 進

松本歯科大学 総合診断学・口腔外科学教室 (主任 徳植 進 教授)

### A Case of Naso-alveolar Cyst with the Consideration on the Related Reports

NAOHIKO KAWATA, SHŌKI MATSUI, ATSUSHI ICHINOSAWA  
MASAO TAKAGI, KOJI SHIBUI, YOSHIHIKO ITŌ, KEI KAKAZU  
KEN FUJITA and SUSUMU TOKUUE

*Department of Oral Diagnostics and Surgery,  
Matsumoto Dental College.  
(Chief : Prof. S. Tokuue)*

#### Summary

A case of naso-alveolar cyst in a 43-year-old woman was reported and, subsequently, 152 identical cases reported in 107 Japanese articles were organized and discussed.

- 1) The most instructional theory was the fissural theory, which was presented in 23 reports.
- 2) The size of many cysts was 10-20mm.
- 3) Many cysts adhered to the cavum nasi and the naso-vestibular, and absorbed bone outside of the maxilla.
- 4) Many epithelial patterns were of the columnar type. The contents were of the mucoïd type and were tinged with yellow.
- 5) It was concluded that the following factors are important in the diagnosis of naso-alveolar cysts;
  1. Relation between cyst and tooth.
  2. Absorbed pattern of the maxilla.
  3. Relation of adherence between cyst and the cavum nasi.
  4. Detailed pathological examination.
  5. Quality of content fluid.

## 結 言

鼻齒槽嚢胞は、1893年 Zuckerkandl<sup>1)</sup>が下鼻道前端部に胡桃大の蜂蜜様内容物をもった嚢腫として、著書の中に記載したのが最初とされ、本邦では1916年久保<sup>2)</sup>が始めて上顎粘液腺嚢腫として報告された、比較的まれな疾患である。私共は最近この1例を経験したのでここに報告すると共に、文献上の考察を試みた次第である。

## 症 例

患者：松○世○，♀，43歳

初診：昭和59年10月18日

主訴：右頬部腫脹

一般既往歴：昭和41年に乳腺炎に罹患し、3日間入院加療した他、著変を知らないという。

現病歴：昭和59年10月17日、長野市内の某歯科

医院にて3) に対するレジン充填のため、同部歯肉に浸潤麻酔を行っている。その直後より同部に軽度腫脹をみたが、麻酔液によるものと考えていた。しかし、翌日よりこの腫脹が著明となったので当科に紹介、来院したものである。

現症：体格、栄養、共に中等度、顔貌は右上口唇より鼻翼基部、眼窩下部、頬部後方にかけての、軽度発赤をもつ瀰漫性の腫脹のため、左右非対称性を示していた(写真1, 2)。特に右鼻腔底部に膨隆が目立ち、いわゆる Gerber 氏隆起も認められた。なお、同部には熱感、および圧痛も触知したものである。

顎下リンパ節は左右側共に、小指頭大のもの各1ヶを触れ、右側には軽度の圧痛も認めた。

口腔内所見では、4-1) 齦頬移行部に軽度の膨隆と圧痛を認め、同中央部には波動も触知した(写真3, 4)。21) は歯髓電気診にて生活歯であるこ



写真1：術前正貌



写真2：術前側貌



写真3：術前口腔内写真



写真4：術前口腔内写真

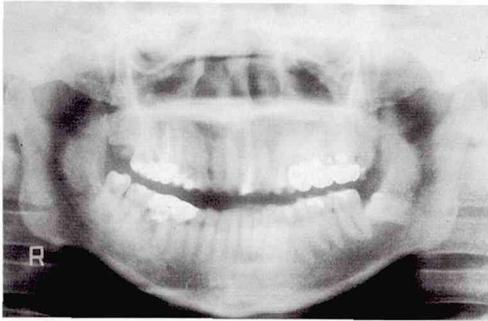


写真5：術前オルソパントモ写真

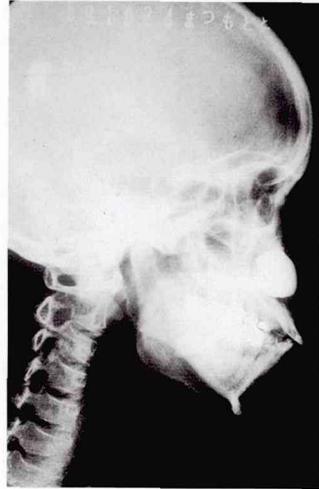


写真6：術前側貌造影 X 線写真

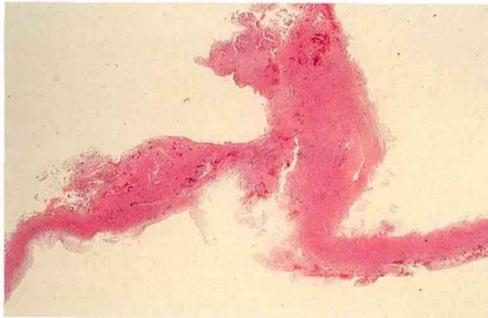


写真7：病理組織像

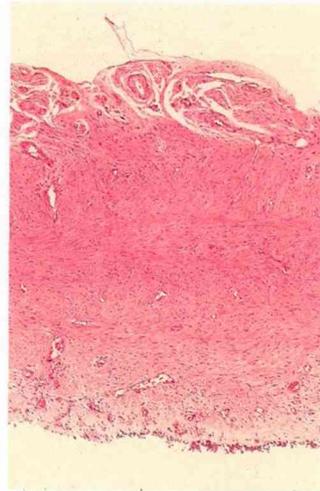


写真8：病理組織像

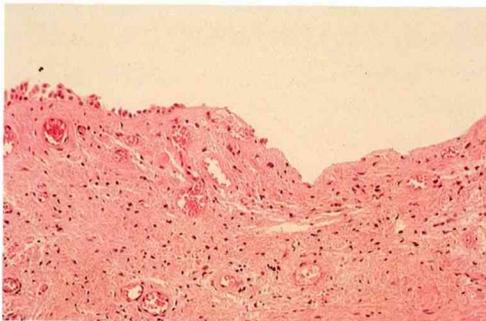


写真9：病理組織像

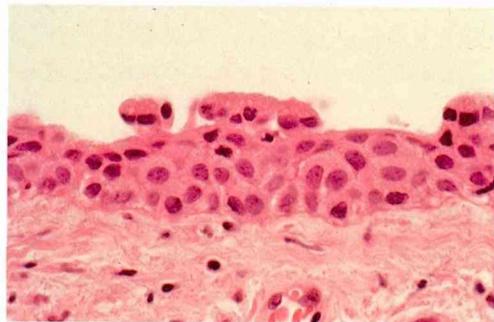


写真10：病理組織像

とを確認した。試験穿刺により茶褐色、半透明、軽度の粘稠性をもつ内容液 3 cc を得たが、コレステリン結晶の存在は認められなかった。

X線所見：パントモ撮影にて、右梨状口下縁に重なるほぼ球状の吸収像が認められた(写真5)。3-1の歯根尖とこの透過像との交通はなかった。76%ウログラフィンによるX線造影写真で、右梨状口下部に約21×21 mmの境界明瞭で、上顎骨々面はほぼ半球状に吸収した像を認め、これは上顎骨の外側に位置していた(写真6)。

臨床検査所見：血液検査、尿検査に異常値は認められなかった。

処置および経過：左側上顎中切歯より右側上顎犬歯部まで、ノイマン法に準じた切開を加え、粘膜骨膜を弁状に剝離したところ、表面灰白色、平滑な囊胞壁の一部を確認し波動も触知出来た。これに続く剝離は比較的容易であったが、一部鼻腔底粘膜との癒着が著しく、神経様組織、小血管も認められたため、結紮、切断後、囊胞を摘出した。摘出後の上顎骨々面は半球状に陥凹しており、他の損傷はなく、歯牙との関連は認められなかった。摘出創は縫合し閉鎖創とし、鎮痛、消炎、抗生物質を投与し洗浄を行ったものである。術後1週間目、鼻翼部を中心とした腫脹、Gerber氏隆起は消失し良好な経過を示した。術後1年を経過した現在、右鼻翼基部に軽度違和感を覚えるのみで、その他の所見は認められていない。

病理組織検査所見：囊胞壁外層の一部には筋層が附着しており、明らかに顎骨の外側に存在していることがわかった(写真7)。又、神経線維束、小血管なども認められた(写真8)。囊胞上皮は全体として炎症、感染のためか、化生あるいは破壊的变化を示し、一部では全く消失しておりすでにその定形的形態を失っていたものである(写真9, 10)。

## 考 察

この種の確定診断には摘出囊胞の組織検査を行う必要があるが、この所見に加えて、臨床的所見、特に手術時所見を十分に参考にしなければならない。

ここに過去の文献107編<sup>2)-108)</sup>に報告されている152症例をもとに、1) 発表文献、2) 名称の推移、3) 囊胞形成の機転説、4) 発生年齢および男女

別、左右別、5) 囊胞の大きさ、6) 癒着部位と骨吸収状態、7) 上皮および内容液の性状、8) 内容液の色調等の各項目ごとに分類、集計、検討し若干の考察を試みた。

### 1) 発表文献 (図1)

1916年、久保が大日本耳鼻咽喉科会報に本囊胞の6例を報告しているのに始まり、最も多い発表文献は、日本耳鼻咽喉科会報29例、次いで耳鼻咽喉科20例であった。歯科領域でも日本口腔外科学会雑誌19例と多いが、1920～1950年代は耳鼻科領域での発表が主となっており、1960年代以後は歯科領域での報告が目立っている。

### 2) 名称の推移 (図2)

本囊胞の名称は久保が、①上顎粘液腺囊腫と称して以来、②線毛圆柱上皮囊腫、③鼻前庭囊腫、④鼻前庭囊胞、⑤鼻齒槽囊胞、⑥鼻口唇囊胞などの名称が主に使用されてきている。特に1920年代より1950年代までは、鼻前庭囊胞の呼称で報告が多く、1960年代以後は鼻齒槽囊胞、鼻前庭囊胞の呼称が目立っており、これは耳鼻科、歯科領域からの文献発表が多出してきた時期と一致している。

### 3) 囊胞形成の機転説 (図3)

文献に記載された囊胞形成に関する機転説を分類すると、①顔面裂孔発生説、②貯溜囊胞説、③胎生期器官残遺説の3説が主なものであった。特に、①顔面裂孔発生説が23文献と最も多く考察されてきており、②貯溜囊胞説が8文献、③胎生期器官残遺説は本邦では支持する文献は認められなかった。

### 4) 発現年齢、男女別、左右別 (図4)

152名中、年齢不明23名を除いた129名中、発現年齢は10～70歳代におよぶ範囲に認められているが、その多くは男女共に20～50歳代に集中し計106名中、約69%を示めていた。

又、年齢不明23名、部位不明14名、計37名を除いた115名で存在部位の左右別を見ると、右側が計50例、左側が計54例とほぼ同数で左右差はなかった。なお少数ながら、両側に存在する6例および正中部に存在する3例が報告されている。

### 5) 囊胞の大きさ (図5)

全囊胞個数160例中、大きさが不明の78例を除いた82例中、 $\phi$  0～40 mm以下が計74例で約90%と集中し、その中でも $\phi$  10～20 mm以下が42例と最

文献年代	大日耳鼻会報	日耳鼻会報	耳鼻臨	東北医誌	耳鼻咽喉	慶応医	大阪医大誌	東京女子医大誌	東京医新誌	大阪医新誌	新潟歯会誌	齒科医学	口腔病会誌	愛知学院大歯会誌	日口外会誌	日口科会誌	岩手医大会誌	歯学	九州歯会誌	岐阜歯会誌	
1920	.																				
1930	.	.	.	.	⋮	.			.	.											
1940	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮															
1950	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	.														
1960	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮								⋮	⋮					
1970	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮									⋮	⋮					
1980	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮									⋮	⋮					
文献数	6	29	12	1	20	1	1	2	1	1	1	1	1	1	19	6	1	1	1	1	合計 107
症例数	13	38	13	1	24	1	2	3	1	1	1	1	1	1	46	7	1	1	1	1	152

図1：発表文献

も多く存在していた。又、51 mm 以上にもおよぶもの、3例が報告されていた。

6) 癒着部位, 骨吸収 (図6)  
 嚢胞の癒着部位は図表顔面内, ①, ②, ③, ④

名称 年代	粘液腺 囊腫	線毛円柱上皮 囊腫	鼻前庭 囊腫	鼻前庭 囊胞	鼻齒槽 囊胞	鼻口唇 囊胞
1910	•					
1920						
1930	• •••	• •	•• • •••		••	
1940	•••	•	•••• ••••			
1950	••		••••• ••••• •••••			
1960	•		••••	••	••	
1970			••	•	•• ••••	
1980			•	•	•••• ••	•
症例数	21	3	78	8	32	10
文献数	14	3	<b>56</b>	<b>7</b>	<b>25</b>	<b>2</b>

図2：名称の推移



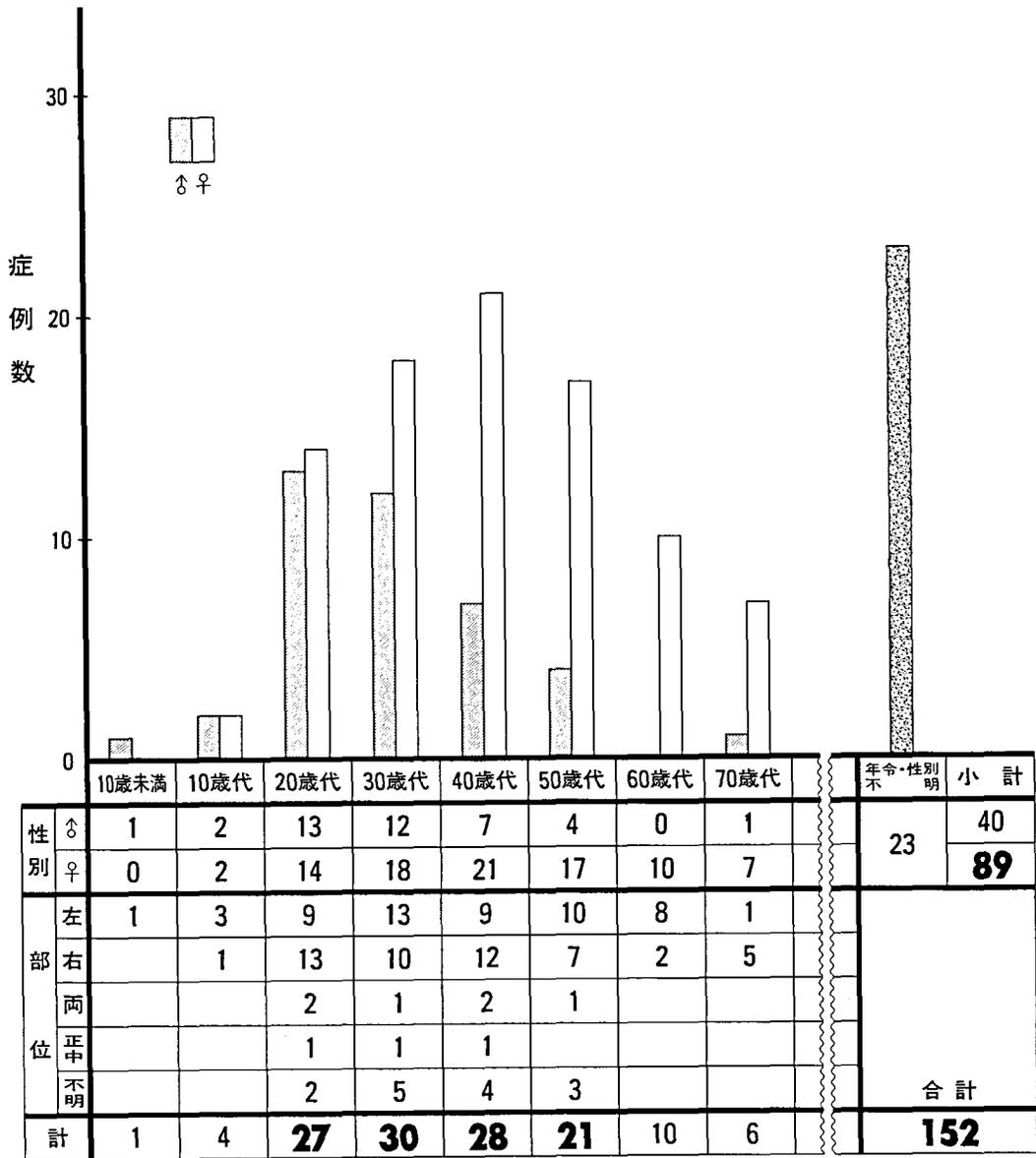


図4：発現年齢（男女別，左右別）

徴的な症状を現すものと考えられた。

骨吸収は、不明例を除いた68例中、22例認められた。

7) 上皮および内容液の性状 (表1)

文献中に記載されている上皮名を、単層上皮、多列上皮、重層上皮、混合上皮、その他と分類し集計したところ、多列上皮が25例、重層上皮が20例、単層上皮が5例で、円柱上皮の形態を示すも

のが大多数であった。これら上皮内に腺、あるいは杯細胞がどの程度出現しているかをみると、腺、杯細胞を有するものが26例、認められないもの6例であった。

内容液の粘稠度に関して記載されていたものは合計46例で、そのうち40例が粘稠性を示したものであった。

8) 内容液の色調 (表2)

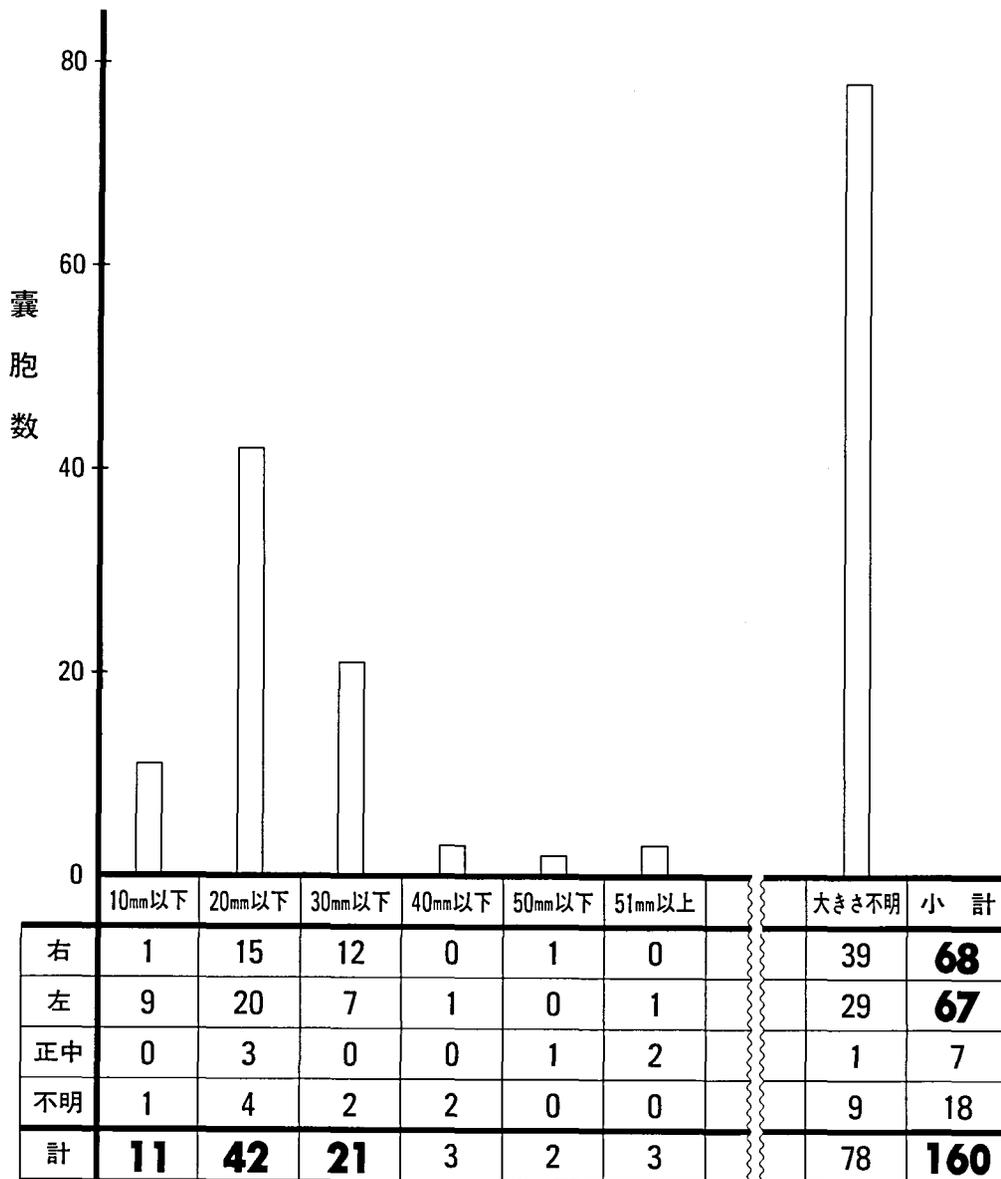
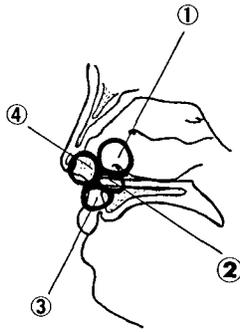


図5：囊胞の大きさ

色調は不明79例を除いた81例中、54例が帯黄色系をみせていた。

以上の如き文献例の傾向を括め得た結果、これら囊胞の検索は、組織検査において、単に上皮の種類、腺、杯細胞等の有無のみならず、その周囲組織像の性状に加えて、臨床所見、ならびに手術所見などにおける詳細な観察をも含め合わせて始めて診断が可能となると考えたものである。

診断を正しく導くと共に、形成の機転検討の根拠を得るためには、①囊胞と歯牙の関係をX線像および手術時所見で確かめること、②本囊胞の大きさが10~20mmの範囲に多く集中している所から、軟組織内に発生したものがこの程度に増大すると、鼻翼部周囲への腫脹として症状が発現してくると考えられる故に、発症時期、およびその時期の自覚症状を明確にしておく必要があろう。



骨 吸 収 癒 着 部	陷 凹	血 状 陷 凹	浅 い 陷 凹	囊 胞 ½	吸 収 無 し	骨 吸 収 不 明	計
① 下鼻甲介前方	1					2	3
② 鼻腔底部	4		4	1	18	12	<b>39</b>
③ 梨状口下縁 及び 上顎骨々膜	1				1	1	3
④ 鼻前庭部	3				2	25	30
癒着無し						1	1
癒着不明	1	3	4		25	<b>51</b>	84
計	10	3	8	1	46	92	160

図6：癒着部位と骨吸収

表1：上皮および内容液の性状

上 皮	囊胞数	腺 細 胞		杯 細 胞		上 皮 脱 落		粘 稠 度		
		有	無	有	無	有	無	漿液性	粘液性	不 明
単 層	単層円柱	4							2	2
	単層上皮	1								1
多 列	多列円柱	<b>18</b>	<b>3</b>	2	<b>6</b>	3		1	5	12
	多列線毛	6			2			1	1	4
	多列上皮	1		1					1	
重 層	重層円柱線毛	7	2					1	6	
	重層円柱	7		3	1		1		2	5
	重層扁平	6				1		1	2	3
合	円柱上皮	<b>24</b>		2	<b>4</b>			2	4	18
	線毛上皮	6			1	1		1	3	2
	扁平上皮	1							1	
混 合	単多層円柱	2	2		1			1		1
	単多層線毛	1		1	1				1	
	円柱線毛	<b>23</b>	<b>4</b>	2	<b>8</b>		2	1	8	14
	重層扁平+円柱	8	1	1	1	1	1		2	6
	移行+円柱	7			1					7
	鱗皰+円柱	4	4				1		2	2
	扁平+円柱	4								4
不 明	30			1		1			3	27
計	<b>160</b>	16	12	27	6	5	1	9	<b>43</b>	108

表2：内容液の色調

上 皮		囊胞数	淡黄色	黄色	灰黄色	黄褐色	茶褐色	赤褐色	褐色	乳白色	不明
単層	単層円柱	4	2	1	1						
	単層上皮	1	1								
多列	多列円柱	<b>18</b>	3	4	1	4					6
	多列線毛	6					2			1	3
	多列上皮	1				1					
重層	重層円柱線毛	7	2	2		2			1		
	重層円柱	7	3				1				3
	重層扁平	6	2	2			1				1
合	円柱上皮	<b>24</b>	1	2		3		1			17
	線毛上皮	6					2			1	3
	扁平上皮	1									1
混	単層円柱	2	1								1
	単層線毛	1					1				
	円柱線毛	<b>23</b>	5	2		2	2		1		11
	重層扁平+円柱	8	1				1				6
	移行+円柱	7				7					
	線毛+円柱	4				1	1				2
	扁平+円柱	4						1			3
不 明		30	2	1		1	3		1	22	
計		<b>160</b>	<b>23</b>	<b>14</b>	<b>2</b>	<b>21</b>	11	5	2	3	79

③骨内に形成される囊胞の骨吸収とは異なる形態として、圧迫によると考えられる皿状、又は半球状の吸収は、増大するに従い、その骨辺縁が鈍的に形成されている症例が多い所から、その吸収状態を明確に記録しなければならないだろう。④癒着の有無とその癒着部位を正確に観察する必要がある。これは、本囊胞の発生機序にとって重要な所見になり得る。⑤上皮形態の種類と組織内の腺、杯細胞の有無に注意しなければならないが、一方、感染あるいはその他の刺激により上皮は変化していくものであることも考えなければなるまい。又、その周囲組織の観察も必要である、例えば筋組織の存在は、囊胞が骨外に、あるいは骨内に存在したものを決定し得る重要な所見となるであろう。

なお内容液の性状は、腺、杯細胞が存在することが関係すると考えられるが、これも又、感染その他の刺激により、コレステリンの存在、粘稠度の変化、色調などと同様、多々変化をみせることも考慮すべきであろう。

結 語

43才、女性、右側梨状口部に発生した鼻歯槽囊胞の1例を経験したので、本邦における107文献、152症例についての小括および考察を行った結果、

1. 本症例はX線所見にて、右梨状口下部に21×21mmの半球状骨吸収を認めたもので、鼻底部と癒着していた鼻歯槽囊胞であった。病理組織検査で、囊胞壁外層に筋、神経線維束、小血管が

認められ、壁上皮は化生が著しく、破壊的变化を示したものである。又、内容液にコレステリンの存在をみず、粘稠性、茶褐色半透明を示していたものである。

2. 本邦における107文献、152名、160例について小括すると、

- 1) 顔面裂孔発生説が23文献と多かった。
- 2) 囊胞の大きさは、10～20 mm に42個と多く、この時期の発症例が多かった。
- 3) 癒着部位は鼻腔底部、鼻前庭部に多く、骨はいずれも外方より吸収され、22例を数えている。
- 4) 囊胞壁は円柱上皮が多く、腺、杯細胞の存在が目立ち、内容液は粘稠性のものが大半を示していた。
- 5) 内容液は黄色系のものが多かった。という結果をみている。

3. 自験例と文献小括をふまえ、鼻齒槽囊胞との診断を附す場合には、

- 1) 囊胞と歯牙の関連性が無いこと
- 2) 顎骨の吸収状態が、外側よりの圧迫による形状を示していること
- 3) 鼻腔底領域との癒着の有無の確認
- 4) 病理組織学的には、囊胞壁周囲組織の詳細な観察と上皮の性状
- 5) その他、内容液の性状なども記載すべき所見であると思われる。

稿を終るに際し、改めて組織学的検討を共にして下さった鈴木鍾美教授（岩手医大歯学部口腔病理学教室）に深謝する

#### 文 献

- 1) Zuckerkandl, E. (1882) Cysten in der Nasenschleimhaut. Normale und Pathologische Anatomie der Nasenhöhle, Vienna, W. Braunmüller.
- 2) 久保猪之吉 (1916) 上顎粘液腺囊腫 = 就キテ。大日耳鼻, 26 : 1187—1188.
- 3) 田中芳次郎 (1927) 鼻前庭外側壁粘膜下 = 生ゼン繊毛円柱上皮囊腫ノ一例。大日耳鼻, 37 : 202.
- 4) 福渡六郎 (1928) 鼻前庭囊腫及口腔底皮膚様囊腫。耳鼻臨床, 23 : 512.
- 5) 代田源六郎 (1928) 鼻前庭囊腫 = 就テ。日耳鼻, 34 : 1352—1368.
- 6) 前川重和 (1930) 両側性鼻前庭囊腫。東北医誌, 27 : 204—206.
- 7) 林 成夫 (1933) 鼻底部粘液腺囊腫 = 就イテ。耳喉, 6 : 921—928.
- 8) 山口靖夫 (1933) 鼻前庭囊腫。耳喉, 6 : 207—212.
- 9) 重信正道 (1934) 上顎性粘液腺囊腫ノ一例 = 就キテ。慶応医学, 14 : 189—195.
- 10) 豊田文一 (1934) 鼻前庭囊腫ノ1例。日耳鼻, 40 : 293.
- 11) 小野文彦 (1934) 鼻前庭囊腫に就いて。歯科医, 5 : 125—136.
- 12) 稲川俊吉 (1935) 鼻底粘膜下 = 生ゼル繊毛円柱上皮囊腫ノ一例 = 就テ。大日耳鼻, 41 : 1124—1131.
- 13) 菊地三通男 (1935) 鼻底部粘液腺囊腫ノ1例。耳喉, 8 : 413—418.
- 14) 宮竹 卓 (1935) 鼻前庭囊腫ノ1例。耳喉, 8 : 274.
- 15) 加藤二郎 (1935) 本邦文献に現はれたる上顎粘液腺囊腫の統計的観察, 附自家症例。東京医事新誌, 2927 : 1086—1089.
- 16) 加藤二郎, 楠本正治 (1936) 上顎粘液腺囊腫化膿例。耳喉, 9 : 511—517.
- 17) 河合郁二 (1936) 最近経験した3症例。大阪医事新誌, 7 : 1503—1504.
- 18) 濱野 博 (1937) 鼻前庭囊腫化膿例。耳鼻臨床, 32 : 1122—1124.
- 19) 細田忠四郎 (1937) 鼻前庭腫瘍症例。耳鼻臨床32 : 507—508.
- 20) 古川隆俊, 川野 昇 (1937) 上顎粘液腺囊腫例。耳喉, 10 : 821—827.
- 21) 張 俊發 (1938) 鼻前庭囊腫及歯根囊腫 = 就テ。耳喉, 11 : 280.
- 22) 石井 正 (1938) 鼻前庭外側壁粘膜下 = 生ズル繊毛円柱上皮囊腫知見。耳鼻臨床, 33 : 328—329.
- 23) 石氏三郎 (1939) 鼻前庭囊腫の1例に就て。耳鼻臨床, 34 : 479—485.
- 24) 小西 寛 (1940) 鼻前庭囊腫の1例。耳喉, 13 : 331—333.
- 25) 近藤兼吉 (1941) 鼻前庭囊腫の1例。耳鼻臨床, 36 : 337—342.
- 26) 渡部小伊志 (1941) 鼻前庭囊腫ノ一例。日耳鼻, 48 : 473.
- 27) 高橋武雄 (1941) 左側顔面局所ノ知覚異常ヲ惹起セル巨大ナル上顎性粘液腺囊腫知見。口病誌, 5 : 54—68.
- 28) 遠藤純一, 永井半郎 (1942) 化膿せる上顎粘液腺囊腫症例。耳喉, 15 : 727—731.
- 29) 林 啓介 (1942) 顔面破裂囊腫の1例。耳喉, 15 : 977—982.
- 30) 久保隆一 (1943) 両側 = 発生セル上顎粘液腺囊腫。大日耳鼻, 49 : 264.
- 31) 久保村雅夫 (1944) 鼻前庭囊腫症例。大日耳鼻, 47 : 144.
- 32) 小島録, 江島一郎 (1945) 鼻前庭囊腫 = 就テ。大日耳鼻, 46 : 1000—1008.

- 33) 佐藤 猛(1945)鼻前庭囊腫症例。大日耳鼻, 48 : 231.
- 34) 矢内一郎(1948)鼻前庭囊腫の一例。耳鼻臨床, 43 : 322-324.
- 35) 山崎敏子(1949)鼻前庭囊腫の1例。日耳鼻, 52 : 169-170.
- 36) 梅村正道(1950)鼻前庭囊腫症例及びその統計的観察。耳喉, 22 : 301-306.
- 37) 鈴木裕子, 内海貞夫(1951)巨大なる鼻前庭囊腫症例。日耳鼻, 54 : 479.
- 38) 萬城目登, 飯田正夫(1952)鼻前庭囊腫の1症例。日耳鼻, 55 : 131.
- 39) 原田 孝, 立浪信次(1952)鼻前庭囊腫の1例。日耳鼻, 55 : 563.
- 40) 石原 雄(1952)鼻前庭囊腫1症例。耳喉, 24 : 216-218.
- 41) 早川富之助, 山口 浩(1953)上顎粘液腺囊腫症例。耳喉, 24 : 562-564.
- 42) 山本 哲, 山本十一(1953)上顎粘液腺囊腫並に上顎術後囊腫各1例。日耳鼻, 56 : 128-129.
- 43) 大草次郎(1953)鼻前庭囊腫例。日耳鼻, 56 : 279.
- 44) 不破成和(1953)鼻前庭囊腫の1例。日耳鼻, 56 : 422.
- 45) 小幡達男(1953)上顎性粘液腺囊腫の1例。耳喉, 25 : 379-381.
- 46) 佐藤イクヨ, 長沼雅子(1954)急性炎症々状を呈した所謂鼻前庭囊腫並に上顎洞を占據した大なる濾胞性歯牙囊腫。東女医大誌, 24 : 229-235.
- 47) 石川 正, 鈴木裕子(1954)鼻前庭部の囊腫2症例。日耳鼻, 57 : 389.
- 48) 下村 勲(1954)鼻前庭囊腫の1例。日耳鼻, 57 : 490.
- 49) 田中裕一(1954)鼻前庭囊腫例。日耳鼻, 57 : 1144.
- 50) 片山 宏, 橋本かづ子(1954)鼻前庭囊腫の1例。耳鼻臨床, 47 : 484-485.
- 51) 市原鶴子(1955)鼻前庭囊腫二症例。東女医大誌, 25 : 577-579.
- 52) 黒住静之(1955)鼻前庭囊腫の一例。耳喉, 22 : 85-86.
- 53) 中嶋卓磨, 干賀新三(1955)鼻前庭囊腫2例。日耳鼻, 58 : 1049.
- 54) 大沢 寛, 加藤 隆, 板倉 秀(1956)鼻前庭囊腫症例。日耳鼻, 60 : 1255.
- 55) 星谷富蔵(1956)鼻前庭囊腫の1例に就て。口科誌, 5 : 336.
- 56) 佐藤靖雄, 高橋米枝, 福田 修, 篠原 靖, 大島弘至(1956)鼻前庭囊腫3症例。耳喉, 28 : 598-602.
- 57) 松本 明(1957)鼻前庭囊腫症例。耳鼻臨床, 50 : 188-190.
- 58) 関 忠直(1957)鼻前庭囊腫。日耳鼻, 60 : 134.
- 59) 三吉康郎, 横山恒夫, 大槻 尚(1957)巨大なる鼻前庭囊腫の1例並びにその統計的観察。日耳鼻, 60 : 156-157.
- 60) 大草次郎(1957)化膿性鼻前庭囊腫症例。日耳鼻, 60 : 846-847.
- 61) 上野 幹(1957)左鼻前庭囊腫症例。日耳鼻, 60 : 991.
- 62) 中島雪夫, 山崎 隆, 宮竹 昭, 竹内治一(1958)鼻前庭囊腫の2例。大阪医大誌, 18 : 192-193.
- 63) 増田 守(1958)鼻前庭囊腫の症例。日耳鼻, 61 : 221.
- 64) 飯野一夫(1958)鼻前庭囊腫の1例。日耳鼻, 61 : 225-226.
- 65) 梅村正道(1958)鼻前庭囊腫症例。日耳鼻, 61 : 312.
- 66) 小林孝良(1958)鼻前庭囊腫の1例。日耳鼻, 61 : 618.
- 67) 富永泰栄, 川崎朝夫, 吉岡勝行(1958)鼻前庭囊腫の1例。日耳鼻, 61 : 945.
- 68) 鈴木盛明, 皆川武生(1958)鼻前庭囊腫症例。耳鼻臨床, 4 : 295-298.
- 69) 横矢幹雄, 坂本毅一(1960)鼻齒槽囊胞の1例。口外誌, 6 : 331-332.
- 70) 河合 幹, 上条ゆり, 野々村徹也(1961)鼻齒槽囊胞の1例。口外誌, 7 : 102-104.
- 71) 伊集院 健(1961)鼻前庭囊腫症例。日耳鼻, 64 : 1166.
- 72) 郡 忠昭(1962)両側性鼻前庭囊腫の2例。耳喉, 34 : 1139-1141.
- 73) 富永泰栄, 川崎幹生, 大塚 哲(1963)KlestadtのCleftcyste 日耳鼻, 66 : 641.
- 74) 楽満一夫, 小西武彦(1963)鼻前庭囊腫の2例。日耳鼻, 66 : 866.
- 75) 岡田 孝, 木邑知義, 中原 爽, 寺岡四郎, 青木啓次(1964)鼻齒槽囊胞の3症例について。口外誌, 10 : 292-295.
- 76) 田中博之(1964)上顎正中部付近囊腫3例。日耳鼻, 67 : 73.
- 77) 渋井弘一, 原田品子(1965)鼻前庭囊胞の1症例及びその発生原因の考察。耳喉, 37 : 513-517.
- 78) 豊田 務, 和田秀一(1965)巨大な鼻前庭囊胞の1例。日耳鼻, 68 : 1625.
- 79) 土田雅通(1968)鼻齒槽囊胞の1例。九州歯会誌, 22 : 80-83.
- 80) 近藤栄二, 植木直之, 広瀬典富, 榎本昭二(1968)鼻齒槽囊胞の1例。口外誌, 17 : 594-597.
- 81) 久野吉雄, 東理十三雄, 大泉昌子, 斎藤光弘(1970)鼻齒槽囊胞の2症例について。口外誌, 16 : 406-410.
- 82) 伊藤祐久, 勝田兼司(1973)鼻前庭囊胞の4症例。日耳鼻, 76 : 417.
- 83) 太田 舜, 小田春夫(1973)鼻前庭囊胞の1例。口外誌, 19 : 72-76.

- 84) 佐藤田鶴子, 大竹 繁, 東理十三雄, 河越正顕 (1973) 鼻齒槽囊胞の1症例. 口外誌, 19: 100-103.
- 85) 竹内博之, 横田 惇, 渡辺文磨, 中村保夫(1973) 鼻齒槽囊胞の1例について. 口外誌, 22: 268.
- 86) 石川富治郎, 佐藤田鶴子, 久野吉雄, 東理十三雄 (1974) 鼻齒槽囊胞の1症例. 歯学, 62: 423.
- 87) 大澤博之, 武藤次郎, 法水正文 (1975) 鼻口蓋管囊腫の2症例および鼻前庭囊腫の1例. 耳喉, 47: 351-357.
- 88) 浅野賢一, 紫田寛一, 今井一彦, 藤木芳茂(1975) 鼻齒槽囊胞の1症例報告. 岐歯誌, 3: 99-101.
- 89) 大峰秀樹, 砂川 元, 石橋克礼, 柳沢繁孝, 中野芳周, 清水正嗣, 上野 正 (1976) 鼻齒槽囊胞の7症例について. 口外誌, 22: 915.
- 90) 越前和俊, 大淵義孝, 小島 誠, 水野明夫, 関山三郎, 野田三重子, 佐藤良三 (1977) 鼻齒槽囊胞の1例. 岩手医大歯誌, 52: 152-159.
- 91) 加藤良六(1977)鼻前庭囊胞の1例. 日耳鼻, 72: 2025.
- 92) 高橋正明, 河島正宜 (1979) 鼻齒槽囊胞の2例. 口外誌, 25: 444.
- 93) 田伏 信, 白数力也, 橋本良知, 辻本守孝, 高須淳 (1979) 鼻齒槽囊胞の1症例. 口外誌, 25: 552.
- 94) 石田 恵, 曾田忠雄, 小野富明, 名倉英明, 伊藤秀夫 (1979) 鼻口唇囊胞9例の臨床的観察. 口外誌, 25: 1422-1426.
- 95) 衣川章三, 阿部正樹, 大橋 靖 (1980) 鼻齒槽囊胞の1例. 新潟歯学会誌, 10: 64.
- 96) 荻原茂樹, 林 洋紀, 倉地洋一, 榎本昭二(1980) 鼻齒槽囊胞の1例. 口外誌, 26: 860-861.
- 97) 鈴木啓介, 内田昌宏, 高野伸夫, 木村利男, 黄国和, 重松知寛, 井上 孝 (1980) 鼻前庭囊胞の2例. 口外誌, 26: 164-169.
- 98) 掘 稔, 横川 正, 会田卓久, 大塚敬子, 安達吉嗣, 鈴木章敬, 田中 博, 工藤逸郎 (1981) 鼻齒槽囊胞の1例. 口科誌, 30: 583-584.
- 99) 基 政敏, 坂上俊保, 有川 真, 大田逸雄, 堂原義美, 山下佐美 (1981) 鼻齒槽囊胞の1例. 口外誌, 27: 1225-1226.
- 100) 服部吉幸, 長尾 徹, 伊藤博之, 栗田賢一, 大西正信, 古賀賢三郎, 掘田文雄, 岡田由美, 亀山洋一郎, (1981)鼻齒槽囊胞の1例. 愛院大歯誌, 19: 203.
- 101) 橋本 滋, 若江秀敏, 熊埜御堂渉, 東山隆男, 富山徳也 (1982) 軟組織に発生する囊胞性疾患の電顕的観察—第1報— 鼻齒槽囊胞の1例. 口外誌, 28: 326.
- 102) 眞鍋敏彦, 川野俊吉, 山田直邦, 有馬良治, 児玉芳邦, 山田公一, 迫田隅男, 芝 良祐 (1983) 鼻齒槽囊胞の1例. 口科誌, 32: 631.
- 103) 長谷川昌宏, 大野康亮, 道脇幸博, 大澤毅晃, 鈴木規子, 吉田 広, 道 健一, 上野 正, 山口朗 (1983) 鼻口唇囊胞の1例. 口外誌, 29: 1169.
- 104) 熊坂秀和, 石川好美, 増田元三郎, 増田正樹, 藤田浄秀(1984). 鼻前庭囊胞の1例. 口外誌, 30: 1624-1629.
- 105) 石塚永幸, 長沼恵子, 佐々木俊憲, 井上温雄, 山崎嘉幸 (1984) 鼻齒槽囊胞の3例. 口外誌, 30: 2167.
- 106) 木村東二, 石川秀俊(1984)鼻口唇囊胞の1症例. 口外誌, 30: 1959.
- 107) 安藤俊史, 高橋雅幸, 須川直機, 下山哲夫, 埜口五十雄, 井出文雄 (1985) 鼻前庭囊胞の1例. 口外誌, 31: 138-139.
- 108) 木邑知義, 岡田 孝 (1985) 鼻齒槽囊胞の2例について. 口科誌, 34: 268.